修士論文中間発表
振る舞いの使い分けを可能とするソーシャルネットワークモデルの提案

慶應義塾大学 政策・メディア研究科修士課程 2 年 CI プログラム
学生番号:80333178 仲山 昌宏 masapon@sfc.keio.ac.jp
平成 17 年 5 月 21 日

概要
本研究では、相手や状況に応じた自分の見せ方の変化をペルソナ (仮面) の使い分けと定義し、複数の自分を示す識別子と、それらが同一人物であるという関係を限定的に開示できるモデルを提案する。

1 背景

インターネットを利用するアプリケーションが数多く登場するなかで、2003 年に登場した Friendster をきっかけにソーシャルネットワーキングサービス (SNS) と呼ばれる分野が大きな盛り上がりを見せている。日本においても、2004 年に個人による GREE、株式会社イーマーキュリーによる mixi などがサービスを開始し、現在国内における SNS の参加者数は 80 万人以上と言われている。

個人間の知人関係をあらわず知人ネットワークを電子化することにより、そのつながりを利用して交流を支援するのが、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス) と呼ばれるサービスである。

SNS の参加者は、それぞれ識別子 (ID) を持ち、その識別子間のリンクとして知人関係を抽象化することにより、知人ネットワーク上の距離に基づいた情報アクセス制御や、知人との関係そのものによる参加者の信頼性の担保を実現している。

しかし、この識別子とそれを結ぶリンクという抽象化の過程において、多様な知人関係の形態や、相手や状況に応じた自分の見せ方の違いなどといった文脈が失われた。その結果、本来は相手ごとに変化していた自分の見せ方が単純化され、例えば自分の情報を、知人関係に基づいて見せるか見せないかという程度でしか自分の見せ方を制御できなくなった。

本研究では、この相手に応じた自分の振る舞い、見せ方の違いを複数のペルソナ (仮面) の使い分けと定義した。つまり、違うペルソナを使い分けることにより、相手ごとに違う自分を見せている。

さらに、複数のペルソナを使い分けていても、別のペルソナがどういうものかを、特定の相手だけに敢えて見せることで、新たな信頼を得ると言うことも現実に行われている。

しかし、これまでの SNS モデルは人間関係の抽象化にとどまり、利用者自身の抽象化が不十分であるため、複数のペルソナを使い分けたり、それらの関係を示すと言うことができていない。

2 目的

ユーザ間の知人関係を利用するソーシャル・ネットワーキング・サービスを拡張する事で、複数のペルソナを相手によって使い分けられるモデルを提案する。

このモデルにより、ユーザはこれまで行っているような「自分の見せ方の変化」をソーシャル・ネットワーキング・サービス上において実現する。

本研究のモデルによって、人間が本来行ってきたようなペルソナの使い分けを、SNS が提供する知人ネットワーク上でも実現する事ができる。

3 要件の考察

人間の活動の中でのペルソナの使い分けを、例を挙げて二種類に分類する。

別人としてのペルソナ　例えば、ある作家がそのペンネームを名乗って一人の作家として会話をしている時と、ペンネームを名乗らずに一個人として会話をしている時ではその会話内容は大きく異なるだろう。

また、彼の個人的な知人は彼が作家である事を知っていても、作家として彼を知る人が、個人的な知人関係を知る必要はない。

このように、極めて別人に近い振る舞いの使い分けをしている場合、彼の持つペルソナはとても分離していると言える。

別人ではないペルソナ　次に、ある教授が、大学で授業を行っているときと、研究室で指導を行っているときでは、様々な振る舞いは異なっていても、どちらもその教授として活動をしている。この場合、彼のペルソナはさほど分離していない。

後者は、既存の SNS のモデル上でも実現する事ができるが、前者は限定的な同一人物関係の開示が必要であり、SNS のモデルを拡張する必要がある。

前者を実現するために、別人に近い形でのペルソナの使い分けを表現する必要がある。

4 複数の識別子を利用するモデル

4.1 複数の識別子

ある利用者が相手や状況によって使い分けているペルソナを、本モデルではそれぞれペルソナが背負っている名前、「識別子」を単位として抽象化する。

利用者は識別子を持つ人物をシステムに登録し、それぞれの識別子を背負って行動することで、状況や相手ごとのペルソナの使い分けを表現する。

SNS 上の知人関係の演算には、ある一利用者が登録した複数の名前 (識別子) のそれぞれを単位とする。別の識別子で行動

をするときは、図 1 で示すようにつながりのない別の人物をシステムに登録する。

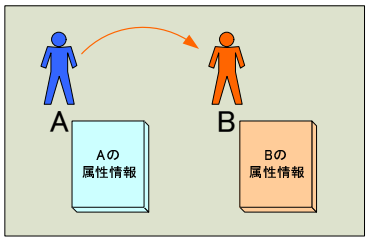

図 1: 複数の識別子

新しく誰かと知人リンクを構築する場合には、自分が持っているどの識別子 (ペルソナ) の知人なのかを選択することになる。これを図 2 に示す。

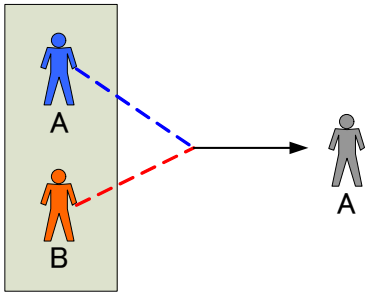

図 2: 識別子の単位とした知人リンクの作成

4.2 同一人物関係の限定的開示

複数のペルソナを使い分けている人でも、それらが全くの別人として振る舞っているわけではなく、知人の一部にはそれらが同一人物であることを知らせているという場合がある。

例えば、ある作家がペンネームと本名で活動していて、本名による友人はその人があるペンネームを持つ作家と同一人物であると言うことを知っている。

この場合、単純に SNS において複数のつながりのない利用者アカウントを使い分けるだけでは実現できない。

本モデルでは、複数の識別子の関係を、複数の識別子の間に構築された特殊な知人リンクとして表現する。このリンクは、以下の二つの特徴を持つが、基本的には従来の知人ネットワークのモデルの拡張として容易に実現できる。

有向リンク　通常の知人リンクは、リンクを構成する両者が合意した場合に行われる無向リンクといえる。

同一人物というリンクは一方向的であり、これをネットワーク上では有向リンクとして扱う必要がある。

知人リンクの可視性　同様に、通常の知人リンクは誰もがその存在を知ることができるが、同一人物関係を見せる範囲は限定的でなければならない。この場合は、リンク元となる端の知人にのみ見せることが要求される。

このように実現された同一人物関係を限定的に開示している状況を図 3 に示す。

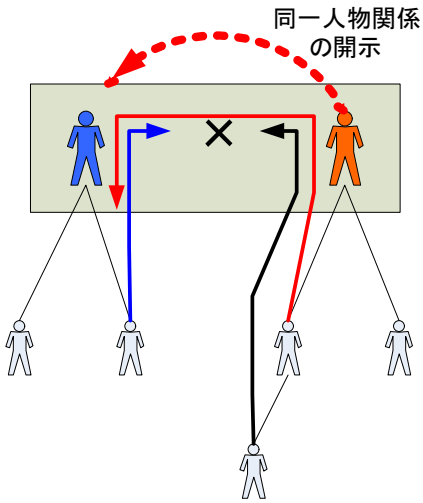

図 3: 識別子の限定的な開示

5 評価方針

本研究では、このモデルを採用した SNS を実装し、広く利用してもらうことにより実証評価を行う。

評価軸として、以下を予定している。

識別子の登録状況　利用者が実際に登録したペルソナの状況により、複数のペルソナを使い分けるという要求が正しいことを示す。

また、ペルソナ間の開示関係がどれだけ設定され、その開示関係がどれだけ利用されたかを把握することで、一方向的な同一人物関係の開示が有効であることを示す。

コミュニケーション　実際に利用者にアンケートを実施し、SNS 内でコミュニケーションを行う上で、複数のペルソナを使い分けることが心理的に有効であることを示す。

6 今後の予定

実証実験と同時に執筆を継続して行う。実証実験の予定を以下に示す。

5 月後半　本モデルを採用した SNS の実装、リリース

6 月中旬　定性評価 (アンケート) の実施